

ロメン・ベルトラン、ギヨーム・カラファ「グローバル・マイクロヒストリー：追跡すべき事例」

Romain Bertrand and Guillaume Calafat, “Global Microhistory: A Case to Follow”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 73-1, 2018, pp. 3-17.

紹介

同論文は、2018年のアナル誌特集号「マイクロ分析とグローバルヒストリー」のイントロダクションである。近年ブームになっている「グローバル・マイクロヒストリー」の方法論、有効性、課題に関して大きな見通しを提示している。

・10年以上前から、「グローバル・マイクロヒストリー」(global microhistory)という表現が、歴史家たち、とくに英語圏の近世史家のあいだで広まってきている。この表現は、1980年代に台頭してきたマイクロヒストリーにおける歴史学上の関心を、1990年代に顕著になってきたグローバルヒストリーのパラダイムと結びつけている。

➔こうした結びつきによって目指されているのは、マイクロヒストリーがこれまで軽視してきた「グローバル的転回」(global turn)によってマイクロヒストリーに新たな活気を与えることなのか。それとも、境界や目的、方法を明確にしようとしているグローバルヒストリーに認識論的な第二の息吹を与えることなのか。

・アナルの同特集号の目的は、内容もテーマも異なる4本の論文¹を通して「グローバル・マイクロヒストリー」の流行について検証し、この旗印のもとにおこなわれている膨大な研究の全体像を提示することはできないにしても、基本的なテーマと方法論に関する傾向をスケッチすることである。これら4本の論文は以下の特徴を示している。

①広範囲に及ぶ相互接触（経済的、政治的、思想的）が合流することで生じる場面や現場への関心の高まり。こうした場面や現場は、限られた地域において短い時間軸で観察されることで、少なくとも15世紀から進行している「第一次グローバリゼーション」の一様ではないプロセスが明らかになる。

➔ロベルト・ザウグの研究

¹ Roberto Zaugg, “The King’s Chinese Spittoon: Global Commodities, Court Culture, and Vodun in the Kingdoms of Hueda and Dahomey (Seventeenth to Nineteenth Centuries)” ; Sebouh David Aslanian, “A Life Lived Across Continents: The Global Microhistory of an Armenian Agent of the Compagnie des Indes Orientales, 1666–1688” ; Darío G. Barrera, “Governing the Countryside: Microsocial Analysis and Institutional Construction in Late Eighteenth-Century Río de la Plata” ; Jessica M. Marglin, “Nationality on Trial: International Private Law across the Mediterranean”.

②グローバルに旅する人々のバイオグラフィ、つまり「グローバルな生」(global lives)への注目。ここでいう「グローバルな生」は、接続(lived connections)とその社会的・文化的な影響を検証し物語る手段として理解される。

→セブー・デイビッド・アスラニアンの研究

③帝国が形成される政治的・制度的構築過程を重視し、観察の焦点距離を変えることによって、歴史や時代区分の不連続性を明らかにすること。それにより、これまで自明であると見なされてきた包括的な政治的実体の内部に、複数の互いに衝突するような地域性の網の目があったことに注意を向けている。

→ダリオ・G・バリエラの研究

④裁判や訴訟が、異文化間の経済的・政治的な関係の問題を探求するための豊かな手掛かりとなること。

→ジェシカ・M・マーグリンの研究

- ・これらのアプローチにおいて、マイクロヒストリーやグローバルヒストリーをどのように考えるかは研究者によってさまざまであり、それらを明確に定義することは困難。
- ・マイクロヒストリーを①文書史料を分析する一般的な方法と見なす研究者もいれば、②バイオグラフィ的、あるいはモノグラフィ的な物語りの原理と見なす研究者もいる。
- ・同じように、グローバルヒストリーを①研究分野や研究対象(「グローバリゼーション」プロセスの長期の歴史)と見なす研究者もいれば、②地域的な統合と断絶の原因、方法、時間性、形態に関する研究のための視点、あるいは解釈上の命令と見なす研究者もいる。
- ・そのため、グローバル・マイクロヒストリーの研究も多様であるが、それでも次のようないくつかの共通点が存在する。

①15世紀の「第一次グローバリゼーション」からヨーロッパの植民地帝国が衰退するまでの期間における循環と移動への関心。

②非ヨーロッパ世界の現実への考察。

③孤立した出来事や個人ではなく、状況や相互作用に焦点を当てたアプローチ。

- ・このような観点からすれば、グローバルヒストリーとマイクロヒストリーが結びつくのは驚くべきことではないし、とりわけ新しいというわけでもない。わざわざ「グローバル・マイクロヒストリー」と言わなくとも、多くの研究者はマイクロヒストリーとグローバルヒストリーの手法を暗黙裡に結びつけてきたのである。

→たとえば、「接続された歴史」(connected history)においては、グローバルヒストリーに特有の研究対象であるディアスポラ、循環、接触場面が取り上げられつつ、それら

を「地面のレベル」(at ground level)で理解するために、マイクロ分析の道具立てが用いられている。

- ・このようなハイブリッドな歴史研究は、広大なパノラマと行為がおこなわれる小さな舞台とのあいだを行ったり来たりし（「細部から全体への移動」）、近世における旅行者、探検家、外交官、商人、船乗り、宣教師、兵士たちの旅とネットワークに焦点を当て、これらの主人公たちが非ヨーロッパの行為者たちと多かれ少なかれ暴力的に接触した状況に研究を限定する傾向があった。
- ・またこうした研究は、陶磁器、珊瑚、ダイヤモンド、砂糖、綿花、藍、コチニールなどの商品や資源の移動にも関心を持ち、ヨーロッパに持ち込まれた「エキゾチック」な動物に関するバイオグラフィを、科学史・思想史・経済史が交錯する研究のなかに入れて
- いる。
- ・もちろん、人間の歴史と動物の歴史とモノの歴史が同じ考察や方法、史料を必要とするわけではないが、一方が他方なくして成り立つと考える人は少ない。例えば、インドへの旅の歴史はフナクイムシや海流の話抜きでは成り立たないだろう。物質的な接続について、あるいは少なくとも交換や循環について物語ることは、不可避免的に「グローバルリゼーション」の地図作成術について問うことになる。

1. 「グローバル・マイクロヒストリー」と再帰性の必要 (“Global Microhistory” and the Need for Reflexivity, pp. 8-11)

- ・グローバル・マイクロヒストリーはオリジナルな方法というよりも、「関係的」(relational)アプローチと「相互作用論的」(interactionist)アプローチとの間に収束する形態である。
→「共有された歴史」(shared history)から「接続された歴史」(connected history)、「交差する歴史」(histoire croisée)
- ・この収束は、似たような研究計画に基づいているというよりも、歴史学や社会科学における比較の手法に関して、批判的考察が積み上げられてきたことに基づいている。
→この点では、グローバルという形容詞を付されたマイクロヒストリーは、必ずしも方法論を否定するわけではない。
- ・マイクロヒストリーが十分に力を発揮することができるのは、グローバルヒストリーがときに無視してしまう側面、つまり物事がどのようにおこなわれているかだったり、史料や文脈の生成であったりを明らかにしようとする限りにおいてである。
- ・マイクロヒストリーのアプローチも一般化の形態を示すが、それは分析のスケールや構造、変数がア・プリオリに与えられることによるものではない。
→そのため、物語の背景として機能する存在をあらかじめ設定しがちなグローバルヒ

ストーリーに疑問を投げかける。

- ・歴史研究におけるマイクロストーリーへの言及は、ただの装飾とは言わないまでも、道具的な扱いにとどまる場合があった。こうした傾向に対して、グローバル・マイクロストーリーという言葉は、マイクロストーリー研究をただのモノグラフとか伝記的なケーススタディと見なす怠惰な戯画化(lazy caricature)から距離を取り、注意深く再読することに役立つ。
 - ➔このことは、一部の研究者がマイクロストーリーを偏狭なモノグラフや狭い専門分野に過ぎないと見なし、ビッグデータという金の子牛に忠誠を誓っている現在において重要である²。
- ・このような再読の結果、マイクロストーリーは実験³と連動した次のような方法の集合であるという見方が次第に受け入れられてきている。
 - ➔拡大鏡で観察された対象の輪郭を描くこと、主要な説明パラダイムに挑戦すること、社会科学との緊密な対話、物語的な創意、カテゴリーと社会的文脈の生成への注目、分析の焦点に関する再帰性
- ・マイクロストーリーの実験的な性質は重要である。
 - ➔なぜなら、それは直線的な議論や目的論を避けて、回り道や不連続を提示し、試行錯誤や先延ばしの事例を語ることを可能にしてくれるからである。
- ・史料に注目し、文書をじっくりと読むことは、その語りのなかで、行為者たちの不確実性やときに重要な誤解を認識できるようにしてくれる。こうした誤解は、ランダムではなく反復的な、行為者たちの相互作用の性質から生じる。
- ・マイクロストーリーの方法論が、多くのヒトやモノが関わり、それらの関係性に応じて変化していく長期の交換の歴史にとって、有益であることは言うまでもない。しかしながら、これによって「グローバル・マイクロストーリー」が、一般化についての考察を免除されるわけではない。そうした一般化がなければ、単なる物語りの貯蔵庫になってしまう危険がある。

² David Armitage and Jo Guldi in the thematic dossier “Debating the Longue Durée,” *Annales HSS (English Edition)*, 70-2, 2015, pp. 215-303.

³ [マイクロストーリーが実験と結びつけて語られる場合、歴史研究を確定的な事実として提示するのではなく、このように描くことも可能であるという一つの実験的な試みとして提示するというニュアンスが込められている。マイクロストーリーにおける実験という考え方については、次のギンズブルグの論考において徹底的に考察されている。カルロ・ギンズブルグ(上村忠男編訳)『ミクrostリアと世界史』『ミクrostリアと世界史 — 歴史家の仕事について』みすず書房、2016年、154-194頁]。

- ・過去の諸々の側面を深く記録しようとする専門的な歴史家と、大きな統合を目指す歴史家との間で、歴史研究が分断される危険が存在している。
- ・事例を多く集めて一般化のレベルを引き上げても、潜在的に無限の状況が存在する研究分野を扱う場合にはあまり意味をなさない。
- ・この点で、エドアルド・グレンディの「例外的な正規」(exceptional normal)⁴という観念は、全体の論理を復元しなければならないような社会的規則性への入り口として考えられるならば有効である。
- ・「例外的な正規」は純粹に単数の事例ではない。なぜなら、系列のなかの不連続として史料のなかに表れるからである。
- ・この系列のなかにある規則性という原理が、関連する文脈(relevant context)という輪郭を与えてくれる。
- ・この文脈は、束縛や戦略や選択の余地によって形づくられる行為の範囲を描くために設定されなければならない。
- ・「バイオグラフィ的」なレベルを用いることの意味は、個人の行為主体性を軽率に強調することに限定されるわけではない。現代的な意味をあまりに強調し過ぎた、個性という概念から逃れるために、「グローバル・マイクロヒストリー」は、集団的な規範と個別の行動との間にある必然的に不安定な関係性を繰り返し検証する道具として役立つ。

2. 「追跡」：社会的文脈へのマルチサイテッド・アプローチ(“Following”: A Multi-Sited Approach to Social Contexts, pp. 12-14)

- ・グローバル・マイクロヒストリーとして分類される大半の研究を構造化しているパラダイムの一つが、ヒト、モノ、コト、論争、さらには感情でさえもヨーロッパという環境設定を越えて「追跡」というものである。
- ・移動、循環、旅を調査することは、文脈の「交差」を研究することにつながる。このことはさらに、さまざまな種類の史料について、生産的な解釈のプロセスを実行することにもつながる。
→史料とは直ちにその意味がはっきりするような透明なデータではなく、歴史研究と結びついて選択され構築されるものである。
- ・極めて異質な文書史料のなかから徴候や痕跡を探し出すという史料を重視する姿勢こそが、公文書館から距離を取っているとされる包括的なグローバルヒストリーに差

⁴ 歴史学文献レビュー⑦を参照。これまでのレビューで繰り返し言及してきた「正規なる例外」と同義である。

し迫った課題を与えている。

- ・それに対して、真の「グローバル・マイクロヒストリー」は、さまざまな種類の文書史料を使用し、歴史家が観察・研究する複数の現場で利用可能なさまざまな史料の特定を可能にしてくれるのである。
- ・追跡はマイクロヒストリーの折り紙付きの方法である。
- ・カルロ・ギンズブルグとカルロ・ポーニは、歴史家が複数の文書館で調査する上で、「名前」を追跡することがアリアドネの糸のようなものになると考えていた⁵。
- ・この方法は、人類学者のジョージ・マーカスによって 1990 年代半ばに推し進められた「マルチサイトッド・エスノグラフィ」と強い親和性がある⁶。
- ・ここでは「グローバル」についての考察というのは二通りに理解されている。つまり①「全体としての社会」を視野に入れた「多元的な」歴史という意味だけでなく、②行為者や「モノ」(actors and 'actants')が旅した道筋を「徹頭徹尾」(right to the end)追跡することへの誘いである。
- ・「グローバル・マイクロヒストリー」においては、研究者の言語的、文献学的な能力の問題はともかくとして、「追跡された」ものについての知識があれば、収集したすべての文書史料に対して比較研究が与えるのとは異なる意味を与えることができる。

3. 距離の生成を問う(Questioning the Making of Distance, pp. 14-17)

- ・追跡アプローチは、接続や距離の性質を真剣に考えることによって、旅や接触状況をグローバルやローカルという定義そのものを検証する下からの観察地点として考察するように導いてくれる。
- ・グローバル・マイクロヒストリーにおいては、距離を実体化するのではなく、距離について判断する(getting the measure of distances)ことが重要であり、それは次のことを意味している。
 - ①行為者の行動を導く距離意識を社会的に特徴づけ、遠く離れた場所への移動に関する彼らの不確実性や疑念を経験の不可欠な部分として認識すること。
 - ②境界を作ったりルートを強制したりするだけでなく、場所のずれや断絶を引き起こす環境的・地形的制約を考慮し、場所が生み出される歴史を考察すること。

⁵ 歴史学文献レビュー③を参照。

⁶ George E. Marcus, "Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography," *Annual Review of Anthropology*, 24, 1995, pp. 95-117.

- ・ローカルとは、ミクロナスケール（通り、近所、村など）の複製でも同義語でもない。それは、空間化された相互作用と関係性の総体であり、一体性(identification)、忠誠、メンバーシップの複数性に注目しなければ詳細に記述することができない。
- ・この点で、グローバル・マイクロヒストリーは「トランスローカリティ」や「トランスリジョナリティ」に関する考察を利用しており、多くの点で「マルチサイトッド・アプローチ」と一致している。
- ・しかしながら、グローバル・マイクロヒストリーに残された問題の一つは、このアプローチが近世以前の時代にも利用できるかどうかということである。
- ・グローバルヒストリー自体が研究対象ではなくアプローチであるならば、古代や中世のグローバル・マイクロヒストリーも可能である。
- ・グローバル・マイクロヒストリーが近世や近代に偏っているのは、スケールを変更するという方法に特徴的なことではなく、文書史料の状態によるところが大きい。
- ・遠く離れた社会間の差異を比較や類推によって考えるのではなく、離れた場所の経験が合唱のように合わさった物語りを作ることは可能であるし、その方が望ましい。
- ・別の言い方をすれば、距離はたしかに行為者の期待や行動に影響を及ぼすが、文化的、法的、経済的差異が必ずしも地理的、言語的距離と連動しているわけではないのである。
- ・距離が相対的なスケールであるという考え方は非常に重要である。このように考えることによって、歴史学上孤立した地域として扱われることがあまりにも多かった特定の循環地域（例えば、近世の地中海とインド洋、あるいは「大西洋革命」のカリブ海）の例外性を前提にすることを避けることができる。
- ・距離は単なる地理的な問題ではない。
 - ①距離は研究される事例の代表性を問い、接続の反復や変則についての考察を促す。
 - ②距離は歴史学の問いを適切なものにするために必要な焦点距離についての考察を促す。こうした焦点距離は、分析のためにあまりに一般的すぎるカテゴリーを使用することと、比較を正当化する閾値、境界、差異が欠けていることとの中間に存在する。
 - ③距離は時間的な側面を有する。「近代化」や「グローバリゼーション」といった目的論的な大きな物語とは対照的に、「グローバル・マイクロヒストリー」は断絶や突然の切断に関心を向ける。
- ・グローバル・マイクロヒストリーには次のような課題がある。
- ・比較のプロセスはどこにあてはまるのか。接続を特定することに先行するのか、それともそこから派生するのか。比較は歴史家の特権なのか、それとも行為者の実践的な能力なのか。変化の研究を、しばしば共時的であるような接続の分析にどのように再導入するのか。史料や行為がおこなわれた現場の非対称性や分散について、「近代世

界の誕生」や「西洋化」といった大きな物語を再構築する誘惑に負けずに、どのように物語ることができるのか。

- ・グローバル・マイクロヒストリーはつねにある種の実験であるため、問題や課題がついてまわる。それらに答えることは容易ではないが、それらを明確に述べておくことは有益である。